『現象学と社会科学』第 8 号
日本現象学・社会科学会編 2025 年 9 月（1-4）

【特集】人種差別に抵抗する現象学と社会学

小手川　正二郎

BLM 運動の後も頻発する黒人差別やコロナ禍でのアジア系の人々へのヘイトクライム、警察によるレイシャル・プロファイリングや在日コリアンへの差別的言説など、今日においてもなお人種差別は国内外で喫緊の課題であり続けている。

ある社会集団が「よそ者」とみなされ、類型化されるプロセスについていち早く現象学的な観点から分析したのはシュッツであった。近年では、批判的人種研究が人種を生物学的・遺伝的なものではなく、社会的・歴史的に構築されてきたものとして分析してきた。しかし、人種による分類に科学的な根拠がないこと、それゆえに「人種（race）は人種差別（racism）の子どもであって、その父親ではない」（コーツ 2017: 10）ということが半ば常識と化した現代においてもなお、人種が人々に「知覚」され、往々にして無自覚な人種差別的な反応につながってしまうのはいかにしてか――まさにこのような問いを前にして、現象学的な分析に再び関心が向けられるようになった。例えば、アルコフやヤンシーは、メルロ＝ポンティやファノンに立ち戻りつつ、反省的な思考に先立つ身体性の次元で、他者を「人種化する」（racialize）知覚やそれに伴う人種差別的な身体的所作、「人種差別」と指摘された際のマジョリティの典型的な反応を分析してきた（Alcoff 2006; Yancy 2008）。翻って日本でも 2000 年代初頭に、郭基煥が『差別と抵抗の現象学――在日朝鮮人の〈経験〉を基点に』（2006 年）で現象学および現象学的社会学の知見を用いて在日朝鮮人の経験を分析し、有坂陽子が「アジア系女性」についての先駆的な研究を英語で発表していた（Arisaka 2000）。近年では、「フェミニスト現象学」との関連で性差別と結びついた人種差別を分析する論者たち（Al-Saji 2014; Ngo 2017）の影響のもと、日本国内の人種的マジョリティによる人種化する知覚についての現象学的分析も試みられつつある（池田・小手川 2021）。

こうした背景のもと、本会委員の稲原美苗、郭基煥、小手川正二郎、佐藤靜の企画により、2024 年 12 月 7 日に國學院大学渋谷キャンパスにおいて、日本現象学・社会科学会第 41 回シンポジウム「人種差別に抵抗する現象学と社会学」が開催された。このシンポジウムでは、多様な形でなお根強く存在する人種差別に対して、現象学と社会学がいかにして迫り、人種差別に抵抗する方途をいかに提示しうるかを検討するために、ヘレン・ンゴ氏（ディーキン大学）、郭基煥氏（東北学院大学）、金南咲季氏（椙山女学園大学）を提題者としてお招きした。ヘレン・ンゴ氏は、差別する側の前反省的な知覚習慣や身体的所作を「人種差別的な習慣」という形で分析した『人種差別の習慣――人種差別と人種化された身体の現象学』（Ngo 2017＝ンゴ 2023）の著者であり、人種の批判的現象学を代表する研究者の一人である。教育社会学を専門とする金南咲季氏は、多様なルーツをもつ子どもたちが接触し継続的な関

係を育みうる「コンタクト・ゾーン」として学校を捉え直すことを提起している（金南 2019）。『差別と抵抗の現象学』の著者である郭基煥氏は、様々な時代にわたって繰り返される、大災害などの非常事態下における外国人犯罪流言について分析し、『災害と外国人犯罪流言——関東大震災から東日本大震災まで』（松籟社）を 2023 年に刊行した。

シンポジウムではまず、オンラインで参加されたンゴ氏が講演を行った。講演の前半部では、著書『人種差別の習慣』で詳しく論じられた人種化される身体の疎外についてさらに分析を進め、それが「生きられた身体」を人種というカテゴリーのもと「対象化」することには汲みつくされない点を明らかにしようとしている。東アジア人女性を「装飾品」のように描く表象をめぐるアン・アンリン・チェンの分析を手がかりに、ンゴ氏は現象学的な分析が暗に前提としている事物や無機物に対する「生きられた身体」の優位を問い直し、人種化によって奪われた自分の身体への馴染みや行為者性を取り戻させるという議論の方向性そのものを顧みる必要を突きつける。講演の後半部では、生まれ故郷を追われた人々が植民地化を被った土地に移住し、新たな家づくりをする際に直面する問題に光があてられる。故郷を追われた人々にとって家の喪失は世代をまたぐ深刻な問題であり新たな家づくりは必要かつ創造的なものでありうるが、彼らの家づくりは移住した土地の先住民にとっては、植民者による土地の略奪と植民地化と地続きである（オーストラリアやハワイへのアジア系の人々の移住やイスラエル—パレスチナも例に出される）。戦災などを逃れた「難民入植者」たちとその子孫——ンゴ氏自身もベトナム戦争時にオーストラリアに逃れた中国系ベトナム人の両親をもつ——が入植植民地主義に巻き込まれ、先住民の排除や消滅に加担し続けることを拒否するためには、（故郷を追われる一方で、歓迎されない土地にある）自らが置かれた立場の緊張を保持し続ける必要がある。ンゴ氏の講演後には、有坂陽子氏も含む質問者による活発な質疑応答がなされた。

シンポジウムの後半では、金南氏と郭氏による提題がなされた後で質疑応答が行われた。金南氏の提題は「学校は人種差別にいかに対峙できるか」という問いに、関西圏・東海圏の学校における具体的な事例を通じて迫るものであった。義務教育段階の学校は、居住地と年齢を基準に、異なる文化的背景をもつ子どもたちが双方向的に交流し、相互に変容し合う「コンタクト・ゾーン」として捉えられる。一方で、学校は移民生徒に日本語の使用を強制したり、彼らをよそ者扱いしたりすることで、差別を維持・再生産する場になってしまうこともある。他方、学校は移民生徒の実情にあわせながら授業のあり方を変え、子どもたちが互いに助け合えるような環境をつくることで、差別に抗するようなハビトゥスを培う場にもなりうる。そうしたハビトゥスは学校の内部にとどまるものではなく、学校間の交流を通して学校外や卒業後にも現働化し「再び学ぶ」可能性に開かれている——こうしたことが具体的な事例の分析を通じて鮮やかに示された。

郭氏の提題は、大規模災害が発生するたびに国内で拡散されてきた、「外国人が犯罪をしている」とする流言を対象とするものであった。災害時の外国人犯罪流言は、外国人に対するマジョリティ国民の強い怒りや懲罰感情を引き起こして彼らに対する暴力を正当化する

だけでなく、そうした暴力を伴わない場合でも一度拡散した情報とイメージが人々の集合的無意識に沈殿していく点で問題である。郭氏は、関東大震災時の朝鮮人犯罪流言と震災直後に書かれた二つの作文集の分析を通して、暴行を加えられた朝鮮人の身体がその人間性を差し引かれて記述されていること、そのようにして朝鮮人をコミュニケーションする主体としてではなく、ただ語られるだけの客体、純粋な記号に貶める「象徴的記号化暴力」のもとで捉えられていたことを示す。さらに、提題の後半部では、東日本大震災の外国人犯罪流言が取り上げられ、それが、被災地における日本人の「秩序正しさ」と犯罪の横行という認知的不協和を解消するために、「外国人に汚名を着せ、日本人の美名を守る機能」を果たしていたことを明らかにした。

金南氏と郭氏の提題は、フィールドやアプローチは異なるものの、日本国内で歴史的に継承されてきた人種差別の実状を明らかにしつつ、それに抵抗する可能性を示唆する点で密接に関連し合うものであり、フロアとのディスカッションも非常に活発なものとなった。提題者として密度の濃い発表をご準備下さったヘレン・ンゴ氏、金南咲季氏、郭基煥氏、司会として質疑応答を導いてくださった稲原美苗氏、そして議論に参加していただいた参加者の皆様に厚く御礼申し上げる。

今号の特集には、シンポジウムでの提題をもとにしたヘレン・ンゴ氏、金南咲季氏、郭基煥氏の論文が収められている。お三方の貴重な論考は、「人種差別に抵抗する現象学と社会学」の今後のあり様を探求するうえで私たちの道標となることを確信している。

文献

Alcoff, Linda Martín, 2006, *Visible Identities: Race, Gender, and the Self*, Oxford and New York: Oxford University Press.

Al-Saji, Alia, 2014, A Phenomenology of Hesitation: Interrupting Racializing Habits of Seeing, in: Emily S. Lee (ed.), *Living Alterities: Phenomenology, Embodiment, and Race*, New York: SUNY.

Arisaka, Yoko, 2000, Asian Women: Invisibility, Locations, and Claims to Philosophy, in: Naomi Zack (ed.), *Women of Color and Philosophy: A Critical Reader*, Blackwell.

Ngo, Helen, 2017, *Habits of Racism: A Phenomenology of Racism and Racialized Embodiment*, Lanham: Lexington Books.（小手川正二郎・酒井麻依子・野々村伊純訳、2023、『人種差別の習慣――人種化された身体の現象学』、青土社）.

Yancy, George, 2008, *Black Bodies, White Gazes: The Continuing Significance of Race*, Lanham: Rowman & Littlefield.

池田喬・小手川正二郎、2021、「『人種化する知覚』の何が問題なのか――知覚予期モデルによる現象学的分析」、『思想』1169 号、岩波書店、68-87 頁.

郭基煥、2006、『差別と抵抗の現象学――在日朝鮮人の〈経験〉を基点に』、新泉社.

郭基煥、2023、『災害と外国人犯罪流言――関東大震災から東日本大震災まで』、松籟社.

金南咲季、2019、「「外国につながる子ども」にふれる」、ケイン樹里安・上原健太郎編著『ふれる社会学』、北樹出版、83-94 頁.
コーツ、タナハシ、2017、『世界と僕のあいだに』、池田年穂訳、慶應義塾大学出版会.

（こてがわ　しょうじろう・國學院大学）